異世界と此処と――

美月凪砂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界と此処と――

【Ｎコード】
Ｎ７６７８Ｒ

【作者名】
美月凪砂

【あらすじ】
世界にとって最大のタブーは、異世界に干渉すること。しかし、ルイ達がいる人形界にそのタブーを破る者が現れた。
ある日、ルイが冒険に出かけたいと言った。始めはディは反対するが、タブーを破る者が現れたと知り、止めに旅に出た。表向きは悪者退治、本当はただ冒険がしたいだけだった……。
旅の途中に彼女達は様々なことがある。どうなっていくのか――

一話

「なんか、冒険したくなってきたねぇディ？」

ルイがこっちを見ながら俺に聞いてきた。珍しく帽子を取ってフードを被っている。

ルイは普段は藍色の帽子を好んで被っている。目深く被るからたまに顔が見えないが。それの所為（せい）か、帽子をとってもフードなどを被るようになった。

ルイは魔法使いのぬいぐるみ。俺はディベア。

俺達は魔道人形と言う魔力で動く人形だ。人形の中に『魔石（ませき）』があり、魔石にはかなりの魔力が宿っている。その魔力がニンゲンで言う脳の働きをしている。

このには多くの世界がある。一番有名なのが人間界。その他にも魔獣界、天使界などがある。俺たちの世界は人形界。多分人間界と一番密接している世界だ。

魔石にも種類があるんだが、説明が面倒だから省く。

ルイは魔法を主に使う魔法系。俺は人形の中で唯一魔法が使えない格闘系だ。

今、俺たちは芝生の上に寝転がっている。何も無い平凡な日々が続き暇をもてあましている。

ニンゲンとは違って年を取ることは無い。成長をする奴としないやつもいる。アディ（俺の弟）は成長するな。

そういえば、まだ会ったばかりの頃はフードだったな。俺が帽子をあげたんだっけか。

「聞いている？」

「あ、あぁ。だけど冒険するにしたって目的がねぇとつまらないじゃねぇか」

俺は起き上がってルイを見た。
今日は風が気持ちいいな。
……冒険か。いいかもしれねぇな。

「あ、そっか。んー……」

ルイも起き上がり腕を組んで一生懸命考えている。首を捻って考えている。
ちょっと前にすげぇ戦いをした奴には見えねぇな。
そういえば、俺も最近大会以外で身体を動かして居ねぇな。今度アディの相手でもするか。

「んー……」
「まだ考えているのかよ！」
「だって、思いつかないんだもん。唯一出てきたのは僕達の存在探しかな」
「いや、面倒だしつまらなさそうだから却下」

そういうとルイはぷくっと頬を膨らませた。
ん？まてよ。そういや……

「最近、力を悪い方に使う魔道人形が多いらしいな。異世界への干渉を試みるとかも」
「え！？じゃあ、倒しに行こうよ！」

立ち上がって大きめの声で言った。
異世界への干渉――それは俺たち魔道人形の間では最大のタブーと

してきた。理由はハッキリしていないが、異世界と繋がると俺たちが滅びるだとか、世界が壊れるだとかだったな。
噂だが異世界への干渉を試みる奴がいるとか。

「場所がわからねぇだろ。第一、噂だ」

そう、噂。ただ単に誰かか面白半分で流したかもしれ無い。わざわざそんなののために動くだなんて面倒だ。
もしそれが本当だとしてもそいつ等の居る場所が分からなければ動けない。
俺がそういってもルイは聞く耳持たず、準備だと抜かしやがる。

「行きたきゃ一人で行け。俺は面倒だ」
「おやおや、それでは私が行きましょうか？」
「「ナイト！」」

傍の木から出てきたのはナイトだった。

ナイトは俺の大の親友。まぁ、キザで馬鹿だけどな。
ルイを見て一目惚れでもしたのか、お嬢様と呼んでいる。
ナイトは武器を主に扱う武器系の魔道人形だ。人型のぬいぐるみ。

ん？なんか服がちがくねぇか？
今までは鎧だったのにそれを全て脱ぎ捨て腰のベルトから下には前がない長い青色の布で中はズボン。ブーツはいつもどおり。上は青いマントに青い前掛けみたいな奴。下は白いただの服みたいだな。

「あれ、服変えたの？」
「えぇ。重いですからね鎧は。で、二人とも面白い話をしていますね」

こっちにゆっくりと向かいながらルイと会話をしている。

「ただの噂だ」

「そうでもなさそうですよ。……ほら、空を見てみればわかりますよ」

言われて二人で空を見ると普通に晴れていた。何もねぇじゃねぇか。そう思った瞬間ピリッと空間に少しひびが入ったような気がした。そこをよくよく見ると薄い長い何かがある。遠すぎて見えない。地上から出ているのか？

「何あれ……」

「異世界への干渉を試みた人形が居るのですよ。あれがこの世界の空全体に広がったら終わりでしょうね。よほどの魔力もしくは犠牲が必要ですねきっと。魔力に関してはお嬢様以上……。犠牲は魔石でしょうね」

「な……！？」

ナイトが鋭い目をして説明した。

んだよ。噂じゃあねぇんだな。身体がうずうずしてやがる。戦いたいんだな。強い奴と戦いたいんだな俺。

「くくくっ」

「ど、どうしたの！？」

「おもしれぇ。倒してやろうじゃねぇか」

きっと俺は今獣の目をしているんだろうな。いい獲物を見つけた肉食動物だ。

「ディ、相手はかなりの使い手ですよ」
「僕も行く！」
「お嬢様、危ないで、す……！？」

ナイトの首に向かって俺は手を出した。それ以上言うなという意味で。

「ナイト、あの薄い線みたいなのは文字だろう？魔法関係の。あれが分かるのは俺たちの中ではルイだけだ。連れて行く。お前の力もほしい」

そういって俺は手を下げた。ナイトはため息をついてやれやれと言った。そして同行することを決めた。
おもしろそうじゃねぇか。

二話

「何でルイはよくてボク達はダメなんだよー！」
「そうよ！私達だって戦えるよ！」

アーマとサラが僕達に反論する。
アーマは激しく羽をバタバタしている。かーわい♪

僕達の仲間のサラとアーマ。サラは女の子で、アーマは性別不明。
サラは音楽で魔法を使う音楽系、アーマは悪魔系。

今度の敵は強くまだ人数が少ないということで僕らの中で力がある
４人で行く事になった。
魔力解除のための僕、魔力が使えなくっても戦えるディ、回復でき
るナイト、情報収集が早い華僑（かきょう）だ。

華僑は赤髪のマリオネットの人形。武器系。
細いけど凄い力があって、両手剣を片手で振り回してしまうほど。

もちろんアーマやサラが居るともっと楽だけどサラは華僑が連れて
行きたくない、アーマは異世界への干渉の魔力と相性が悪いから連
れて行けないんだ。

「人数は少ないほうが良いらしい。今度はかなり危ないからだ。分
かってくれ」
「だからって！」

あ、サラと華僑だけ二人で喧嘩している。
ちなみに、人選はディとナイトが考えた結果みたい。

……華僑がさらにハグした。ラブラブだなぁ。
「俺は、お前を危険にさらしたくないんだ」
「……わかった」
渋々サラは頷いた。華僑は少し笑ってサラを放した。
と、アーマが二人のところに来て、
「ちょ、サラ！なんでだよ！行こうよ！」
「アーマ、テメェにも仕事はある。此処にいろ」
ディがアーマの首根っこ掴んで言った。
仕事？何だろう。
そう思っているとディはアーマに耳打ちをした。するとアーマは分かったと言った。何だろう本当に。
「あ、じゃあ、出発は明日にして！良い物作るから！ね、アーマ」
「う、うん！」
「まぁ、良いでしょうね」
「じゃあ、明日の朝、私の家に来て！華僑は今日は他の人の家に泊まって。アーマは一緒に来て！」
そう早口でサラが言いそれぞれに分かれた。
僕たち４人は僕の家に向かい明日からの事について話した。
時空のヒビがあるのはずっとずっと北の方。かなり遠いらしく、テレポートは出来ない。時空に亀裂が入ったことでテレポートの着いた先が時空のかなたという事もあるんだ。
歩いて約半年。何事もなく順調にいければの話だけど。

そうして夜は更けて次の日になった。サラの家に向かうともう二人はドアの前に居た。

「はい、プレゼント！」
「ボク達の傑作だよ！」

二人からそれぞれ袋を貰った。開けて見るとボクの袋には藍色のマントとサラに直してもらっていた帽子。そして、新しい藍色の服だった。ディは肌色のポッケがいっぱい付いている旅用の服。ナイトには小さめの魔力増幅用の杖と薄い手袋。華僑には新しい服…和服かな？と長刀。

「これは……？」
「僕らが一晩かけて作ったやつ！防御力もあるから旅するにはいいでしょ？」
「ありがとう！」

僕たちは早速着替えて（ボクは家の中で）きた。
帽子は新しくなり、服は藍色で前とそんなに変わらないけど軽くなった。ディは旅しています！って感じになった。ナイトはこの間服を変えた。腰にはさっき貰った杖。そして華僑は着物の前を大きく開けて腰あたりには長刀が差してあった。

「死なないでね」
「もちろん！」
「「行ってらっしゃい！」」

こうして僕たちは冒険に出た――

三話

『報告します。第一魔道人形ルイ、ディ、ナイト、華僑が我等を止めに向かっています』
『ほう。あいつらを倒せばこの私が最強か……まぁいい。４人に刺客を送っとけ。私のところに着くまでに強くするようにな。特にルイだ』
『了解しました』
『くくっ。まんまと罠はまったな』

「？」

何か違和感を感じたのかお嬢様が後ろを振り返った。
あれから3日が経った。歩きなのであまり進んではいないでしょう。
しかし、前とは違いまったく敵が居ませんね。

「どうした？」

華僑が怪訝そうに聞いた。
少し間を空けて答えた。

「いや、悪寒が……」
「敵か？そりゃ楽しみだな」

ディが手をパンっと鳴らした途端目の前に3人ほど忍者らしき人形が現れた。
殺気立っている。武器は刀。腰には手裏剣もありますね。敵……

「誰ですか？場合によっては攻撃しますが」

「……行け！」
三人が此方に猛スピードで向かってきた。早すぎる。
と、お嬢様がとっさに前へ出て、魔法を唱えた。
「シールド！」
ガキィン！この時点で構えているのは敵とお嬢様とディ。私と華僑は剣と抜こうとしている。
お嬢様が居なかったらやられてましたね。私達は剣を抜き構えた。
忍者はシールドを破ろうと攻撃を続けている。
「ねぇ、3，2，1で解くから後はご自由に。3，2，1……」
解けた瞬間四方に散らばった。一瞬忍者は動きが止まってから全員お嬢様に向かった。
「ルイ！」
「〜っ、ファイアーダンス！」
火が踊るように忍者を攻撃した。動くが不規則で対応がしきれていない。
チャンス！私はすぐにお嬢様の元へ向かい忍者の後ろを斬りつけた。
華僑も斬り、ディは首筋をトンッと叩いた。
三人とも倒れ、魔法も解けた。へなへなとお嬢様は座り込んだ。
「お怪我は？」
「無いよ。悪寒ってこれだったのかなぁ」
「しらねぇけど、動いたのがバレタかもな。気ぃ引き締めねぇと…
どうした華僑？」

華僑は長刀をじっくり見つめている。
「……始めて使ったのに凄く前から使っているような感じがしたんだ。凄く使いやすい」
ぶんぶんと振り回し鞘(さや)に収めた。
私は華僑の元に向かった。
「前の剣よりもですか？」
「あぁ」
「もしかしたらニンゲンの時に使っていたのかもね」
魔石には昔の物も記憶されている。それ故(ゆえ)こう云(い)う事がある。
私達はまた歩き出した。
少しずつ少しずつ……。夜が更け野宿の準備をした。
火の周りを囲むように座った。
「……そういえば、此処(ここ)からかなり遠いんでしょ？それでもひびが見えるって事は大きいんじゃないの？」
夜空を眺めながらお嬢様が言った。真正面に居た華僑が答えた。
「そうかも。結構時間が無いかもな」
「いや、あると思いますよ。魔力を使って回復しての繰り返しですから。回復もそう簡単ではないとます」
どんな人形には魔力の限界がある。お嬢様といえど大きな魔法を多く使ったりしたら魔力がなくなりしばらく魔法が使えなくなる。
回復には結構な時間が掛かる。寝るのが一番早いが、最低でも魔法

が発動するために必要な魔力が回復するには3時間は必要……。
それを、異世界へ使うもんだから凄く時間が掛かる……。

「いや、交代だったら魔力が送られない時間が作られねぇんじゃ」
「その手がありましたか……。しかし、それほどの魔力を持っている人形がそう居るとは思いませんが（ディにしてはまともな事を……）」
「犠牲…魔石から直接とかは無いのか？」

華僑が顎に手を当てながら私に言ってきた。

「それが一番手っ取り早いかもしれませんね。魔石自体には多くの魔力があるので格闘系でも使えまからね」
「結局時間はないんじゃん！」

お嬢様が勢い良く立ち上がった。
読みを間違えましたね、私。
と、ディが火を見つめながら、

「だが、そうは言ってもテレポートは使えねぇんじゃねぇの？歩くしか方法がないんだ」
「……確か、この先に大きい町があるはずだ。そこで馬でも買うか？」

華僑が提案した。
魔道人形の中には勿論喋れるのが多い。犬でも猫でも馬でも……。
中には植物、本物の馬もいる。犬の喋れる魔道人形が犬を飼っている人形もいる。
なるほど。盲点でしたね。

「お金は？」
「俺が持っているよ。まぁ、ナイトもディも持っていると思うけどな。お前も。ちなみに俺は一頭も買えねぇ」
華僑が懐（ふところ）から財布を出した。
そして、私達全員を見た。

「僕は持ってないけど。魔法で大体揃うから」
「俺も持ってねぇ。ルイがいるからな」
「私は持ってますよ。しかし、必要な物を買ったりしているのでもう少ないですが」

つまり、金欠。
さて、どうやってお金を稼ぎましょうか……

四話

「さぁさぁさぁ！見てらっしゃい寄ってらっしゃい！綺麗な剣の舞が見れるよー！」

ルイが凄い笑顔で客寄せをしている。
ここはルシェファー王国の城下町の噴水広場。国王は確か魔法系魔道人形だったかな。ウサギの人形だそうだ。

俺達は金が無い。そこでディとルイの提案でナイトの剣の舞で金を稼ごうってわけだ。俺よりもナイトの方が顔が良いだからだとさ。
ディはそんな客寄せなんて柄じゃないし俺は特に出番も無いので俺達は座ってみている。

「ふん。随分来てるじゃねぇか」
「だけどよ、収入は少ないけど？……俺達は何するか、ディ」
「さぁ？」

お、始まったようだ。客はひい、ふう、みい……。２０人ぐらいか。
大体は女らしき人形。
ナイトは前もこうして金を集めていたからか、客受けは良い。それなりにだが金も入る。
ま、馬を買うには足りないけどな。
……俺は立ち上がり刀を抜いた。そして、その場で素振りした。ちなみに、ディの頭上に向かって。

「ちょ！テメェ危ねぇだろうが！」
「悪いな。ま、平気だろ」

俺はけらけら笑いながら素振りする。
お、あんまり動くと危ないぜ？

飽きて刀をしまってまた座った。ディに一発殴られた。と、ナイトの剣の舞が終わったらしい。
なんか、今日は随分大盛況だな。ディが言うにはルイが魔法で幻想的にしたんだとよ。なるほど。
ルイが自らの帽子を取ってその中にお金が入っていく。
……毛糸の髪の毛あったんだ。

「終わったよー！」
「疲れますね……」
「お疲れ。どれくらい金が入ったんだ？」

ディが聞くとルイが数えた。今回は３０００$。これで２３０００$だな。
うーん、馬が一匹１００００$だから、まだまだだな。

「ふぅ。でも、そろそろ他のに変えないとダメですね」
「……何これ？魔法パフォーマンス？」

ルイが公告の一つを指差しながら俺達に聞いてきた。

『魔法パフォーマンス大会出場者募集中！参加費１０００$。優勝者には賞金１００００$さしあげます！』

「これは出ませんとお嬢様！」
「え、僕！？」
「当たり前ぇだろ。テメェが一番適任だ」

とまぁ、ルイが参加することになった。
すぐに受付した。ちょうどルイで最後だったようだ。明日開会らしい。
ルイは何を出そうか迷っていた。
と、ナイトが文字なし魔方陣で良いんではないですか？といって、納得した。

魔方陣は必ず文字がある。が、ルイは文字無しの魔方陣を知っている。大昔文字が無いときに作った物。この世界の物ではない魔方陣だそうだ。

そして、翌日。あっさりとルイが優勝してしまった。
魔方陣で景色を変えたり、剣を受け止めたり、魔法を弾きかえしたり……。
そんな大したこと無いが、文字無しということで優勝だそうだ。

「なんか、あっさり過ぎて実感無い…それよりも魔力使いすぎたよ……ディー、おんぶー！」
「しねぇよ！……あ、いや、金入ったから今日は良いか」

珍しい光景だな。ディがルイをおぶるなんて。ルイはスヤスヤ眠っている。よほど疲れたんだな。
そうして、俺達は馬を買い町を出ようとしたけど――

五話

「おい！城に盗賊が入ったんだとよ！！しかもかなり強いらしい！」

馬を買う前に少し休憩をしようとして俺達は酒場に入った。

ルイはまだ寝ている。チッ。重(おめ)ぇ。

ナイトにルイを渡して席に着き、適当に物を食っていたらいきなり扉が勢い良く開いた。海賊の人形が大声でそう叫んだ。

「嘘だろ……！？国王って今寝込んでいるんじゃ……。国王がやられたらどうするんだよ！」

ザワザワと酒場がざわめく。

……ルイの奴まだ寝てやがる。俺たち三人は目を合わせてルイはナイトがおぶって酒場を出た。

「おい！お前たち何処(どこ)行くんだ！」

さっきの人形が俺達に声をかけた。

客がこっちを見る。俺はにっと笑って、

「助けるんだよ。腕ならしだぜ？腕ならし」

「ほらディ、早く行きますよ」

ナイトが呆れたようにして出て行った。

「ルイはどうするんだ？ナイト、ディ」

華僑が俺達に聞いてきた。

未だにスヤスヤ眠っている。……まぁ、いつか起きるか。
「あぁ？連れて行くに決まってるだろ」
それからダッシュで城に向かった
入り口の兵は倒れている。ふん。軟弱そうな奴等だなぁ。
そのままズカズカ入っていった。と、ルイが起きた。
「ふわぁ……。あれ？ここ何処？」
「城だ。盗賊退治するぜぇ？」
……なんか俺、すげぇ楽しそうだな。ナイトの背中からルイが降りた。
まだ少し眠いのか目を擦っている。と、ナイトがそれを止めさせる。
華僑は呆れる。
……随分緊張感ねぇな。
と、目の前に盗賊らしき人形が現れた。
「て、テメェら誰だ！？」
「いや、そう聞かれましても答える人形は居ないと思いますが……」
ナイト、それは言っちゃだめだ。決まり文句なんだよ。
と、小声で言ったらナイトが納得した。盗賊にも聞えたらしく涙目だ。
……コイツ等強ぇのかよ。
「良くも馬鹿にしたなぁあぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
「……馬鹿にしたも何も無いと思うが」
華僑が冷静にツッコミして、向かってきた盗賊を返り討ちにした。

その後、大声を聞いてやってきた盗賊を次々倒していった。
また走って王座へと急いだ。

「あ……」
「なんじゃ？」

ヨボヨボのウサギの爺さんが剣を持ってそこに立っていた。服は寝巻き。

「あ？寝込んでいたんじゃねぇのかよ！」

つい大声で不躾（ぶしつけ）な事を言ってしまった……。
あーあ、確かこの王国は国王になめた口聞くと捕まるんだっけか。

「「「ディ！！」」」
「しまっ」
「いいんじゃよ。君達が来てくれたおかげで敵がそっちに向かったのじゃから。確かにわしは寝込んでいたが死ぬわけにはいかないからのう」

ニッコリと笑った。
あぁ、良かったぜ……。面倒なことにならなくて。
それから残党を俺達が倒し、けが人をルイとナイトが治していった。
ついでに散らかった所もルイの魔法で直した。

「ほっほっほ。そなた達のおかげで死人がでんかった。礼をするぞ。何が良い？」

今、俺達は王の前にいる。……ルイはまた眠りこけたが。

「礼と言われましても……」
「俺達は金に困っている」
「ディ……！」
「そなたはディというのか。気に入ったぞ。ならば礼として１０００$でよいか？」
「あぁ。助かった」

随分俺が気に入られたのか、ついでに泊めて貰った。
次の日、やっと馬を買い、城下町を出た――

六話

パカラッパカラッ……。
軽快な馬の蹄の音が続いていく。

……僕は最初馬に乗れなかった。三人とも乗れるのに僕は……！
ナイトや華僑のコツを教えてもらったものの、馬が言う事を聞いてくれなくて大変だったよ。
ま、最終的に魔法で捻(ね)じ伏せたけど。

「……おや？あの街は―」
「俺達の街だな」

目の前に大きな街が現れた。
あの街はその昔にナイトとディが出会った場所。そして二人で多くの時間を過したらしい。
僕もナイトとはあの街で出会った。もちろんディ経由で。

「懐かしいですね。行きましょうか」

ナイトが目を細めながら街の大きな門を見つめた。

「あの酒場まだあっかなぁ」
「酒場？」
「あぁ、華僑はしらねぇんだな。俺とナイトが気に入っている酒場だよ」

良く、ソコで喧嘩したり賭けあいとかしたって聞いた。
一度入ったけどスッゴイお酒臭くて笑い声が凄かったなぁ。

ディってソコの人たちに慕われているみたい。なんか、昔盗賊が入ってきたときにディが退治したらしい。……あ、ナイトもか。
門兵に門を開けてもらい中に入った。

「かわらねぇな」
「えぇ。宿、行きましょうか」

ゆっくりと馬を歩かせながら街の中を見た。
人がいっぱいいて、皆ディとナイトの帰りに驚いてそして、喜んでいる。

「ねぇ、酒場には行かないの？」

僕は三人を見ながらきいた。
すると、華僑が呆れ顔で、

「ルイ、馬はどうするんだ？」

そういった。
宿についてナイトが宿屋の主人と話すとなんと、ただで泊めて貰えるって。
本当、人気者って言うかなんと言うか。
とりあえず馬を馬小屋に入れて歩いた。ふと、僕は空を見た。

「な……！あんなに時空のヒビが……！」
「今気が付いたのかぁ？おせぇぞ」
「まぁ、まだ平気だろうな」

大きいヒビがあった。ちょっと前に見たのよりも大きい。早いなぁ。
と、あの酒場についた。ディが先頭で入って行った。皆見向きはし

ない。
が、一人こっちを見て大きな声で言った。
「ディとナイトだぁーー！！！」
全員がこっち……正確には二人を見た。どよめきが大きくなる。
僕たちは適当な席に座って、ナイトはワイン、ディはビール、華僑は緑茶。僕はジュースを頼んだ。
周りにいっぱい人形が来た。あぁ、何か、ナイトと出会った時にも見た顔が……。
「ディとナイトじゃねぇか！久しぶりだなおい！」
「お、あん時のねぇちゃんじゃねぇか！元気にしてたかい？」
「赤毛のあんちゃん随分細っこいな！そんなんで刀振れんのかよ？」
強そうな熊の人形（ディベアじゃない）が笑いながら華僑に言った。華僑が立ち上がった。
まぁ、華僑はマリオネットの中でもかなり細いし、ぽっと見力がなさそうなんだよなぁ。
「よし、お前俺と腕相撲するか。お前が負けたら奢れ。いいな？そういや、見た目だけ強くても弱いって事あるなぁ。実はお前、弱かったり？」
「（カチン）お前の腕をへし折ってやるよ」
二人は空いているテーブルへと向かった。僕たちも行った。
にしても、二人とも随分キレてるなぁ。さっきがビンビン伝わるよ。
華僑は手をポキポキ鳴らしているし、熊の人形はこめかみに青筋立てているし。
と、ディが何か思いついたのか酒場にいる全員に言った。

「なぁ、どっちが勝つか賭けようぜ。ビツと華僑で。一人１０００$から」

あ、あの人形ビツって言うんだ。ってか、知っていたんだ。

皆、ビツに賭けた。僕たちは華僑。

二人はテーブルに肘を突いて手を組んだ。審判はナイト。

「良いですか？二人とも。それではレディー、ゴー！」

勝負は一瞬だった。僕たち以外の人形は皆驚いている。倒れているのは茶色いぶっとい腕。

勝負の結果は華僑の勝ち。まぁ当たり前だよ。

七話

華僑は普通は両手で扱う大剣も片手で振っちゃうほどの怪力なんだから、負けるわけ無いじゃん。

「て、てめぇ……！」

「なーんだ。弱いじゃん。やっぱ、見た目だけだね」

口角をあげ、言った。

周りでは、赤毛に賭けりゃよかったとか言っている。そういや、これで大儲けじゃん。

「ビツが負けるのはこれで3回目だぞ……！」

誰かが言った。

3回目？結構負けてるんだなぁ。でも、言い方からすると結構いっぱい勝負してるのかな？

「俺とナイトとこれで華僑だな。ビツ、俺ともう一回すっか？」

「い、いい……また腕へし折られちゃかなわねぇよ」

ビツはびくびくしながら酒場を出た。

……ディ、腕へし折ったんだ。どんだけだし。

「さぁ、賭けで負けた人は私達にお金を渡してくださいね？」

わらわらとナイトにお金を渡していく。

……随分集まったなぁ。１００００$はいったかな？

ナイトがそれを分けて僕達に渡して座った。と、そのとき！

「ここにルイはいる！？」
「誰！君！」
僕は勢い良く立って酒場の入り口を見た。ソコには魔法系であろう人形がいた。後ろにも大勢いる。
僕を呼んだのは先頭にいるキツネの人形。杖を持っている。
「あたしはウィット魔法隊隊長のコリュ！ルイ、貴女を全力で排除する！」
「皆下がって！」
「お嬢様、私達も加勢しますよ！」
「ダメ！彼女は……っ！ウォーター！」
強い。コリュの実力はかなりある。魔力が伝わる。
多分ナイトたちじゃコリュとは戦えない。きっと、強い魔力に対抗できない。
コリュは僕に向かって炎を出した。僕は水を出して消す。ディと華僑がその隙にコリュの後ろに行って残りの人形を相手にした。ナイトは酒場にいる人形を外に逃がす。
あぁ、後ろの人形もそれなりに強い。ディはきっとやられる。だめだ。誰一人として怪我はさせたくない。
そう考えているうちにもコリュはどんどん攻撃してくる。僕は全て防御し、返し、戦いはヒートアップしていった。もう、酒場は壊れ街もどんどん破壊されていく。
ナイトは皆を逃がし終わったのかディ達の加勢に向かった。
「今此処に出でよ！焼炎竜（しょうえんりゅう）！」

僕の十八番、竜の召喚。杖の先から轟々《ごうごう》と燃え上がる長い物体。それは竜。
竜はコリュに向かって突進してくる。
コリュはバリアーを張ったが魔力の大きさがちがく、竜はコリュ当たった。

あぁ、終わった。さぁ、三人を助けないと。
気が緩んだ瞬間僕の身体に衝撃が走った。身体には矢が刺さっている。魔石には当たってはいないもののダメージはある。
すぐに2本目、3本目も来た。片方は右手に。もう片方は杖に当たった。

杖は壊れ、地面に落ちた。と、僕の身体にもっと大きな矢とは違う衝撃が走った。内側から強大な力があふれ出る。遠くでディの僕を呼ぶ声が聞える。
僕の意識はソコで途絶えた。

八話

「う、わああぁぁぁぁ！！！！！」
「ルイ！」

ルイは頭を抑えてその場にしゃがみこんだ。
コリュは何が起こったのか理解していない。あたふたしている。
しまった。アイツにとって杖は魔力を抑える物。それが壊れたんだ。
ルイの魔力はこの世で一番強大。器が持つはずねぇ！
俺は、ルイの元へと向かった。

「ディ！危ないですよ！」
「んなこたぁ知ってら！ナイト、杖をもってこい！」

ルイと俺の距離は後5メートルほど。と、ルイの体からバチバチと何かが出てきた。
魔力だ。ルイに収まりきれなかった魔力だ。
俺のほうにその魔力は向かってきた。避けれねぇ。

「バリアー！っ！何だよこの魔力。強すぎる」
「華僑……。おいコリュ！テメェも手伝いやがれ！殺されるぞ！」
「え……」
「今のルイは敵も味方も無い。魔力が切れるまで暴走する！」

さすがにコリュも死ぬのは嫌だったのか、華僑の隣に来て一緒にバリアーをはった。
と、ナイトが杖を持ってきた。この街で一番強い杖を持ってきたらしい。

俺はそれを受け取ってルイを見た。
一歩、また一歩、ルイはこちらに向かってくる。バリアーの中にいても分かる。魔力だけなのに物凄く怖い。

「お嬢様……」
「なんなのよ……あれは。まるで化け物じゃない」
『……！』

目が見えた。凄く悲しい色だ。化け物って言われるのがつれぇのか。
バリアーの外に出た。身体に無数の傷が入る。
よくよく街を見るともうボロボロじゃねぇか。あんな遠い所までボロボロだ。
いっぱい傷を作りながらルイに近づく。ルイは俺を怖がって後ろへ下がる。

『う……あ…！』

ルイの体がもう持たないのか。ルイ自身が壊れ始めていく。
俺は急いで歩く。後数歩。俺もボロボロ。
やっと傍までついた。ゆっくりと杖をルイに近づける。杖が光った。
一瞬、凄くまぶしい光が放たれた。

しばらく何も見えなかった。やっと見えるようになって、目を開けると殆どが壊れた街と、倒れているルイ。近くには杖。

「ディ！無事か？」
「まったく、無理をしますね……。リュア！」

ナイトの魔法で俺とルイの傷が治っていく。コリュは華僑かナイトかどっちかの魔法で拘束されていた。

……なんか、何も残ってねぇ。街、こわれたな。すこし、寂しいな。

「ディはお嬢様の傍にいてください。私は怪我人がいないか探してきます」

「俺はコリュを見張っとくよ」

ナイトは瓦礫（がれき）の上を器用に歩いて人形を探した。華僑はコリュの元へと向かった。

こりゃ、しばらくおきねぇな。ルイの奴。グースカグースカ幸せそうに寝ていてよ。俺達ゃ大変だったんだぜ。

そういえば、コリュが『ウィット』って言っていたな。なんか、どっかで聞いたなぁ。なんだったっけ？

お、もう夕暮れじゃねぇか。あぁ、今日はすげぇ疲れた。

九話

「すぅ、すぅ……」

暴れて疲れ果ててルイはぐっすりと眠る。
此処は宿。ディとナイトは隣の部屋でコリュに詰め寄っている。俺はルイの看病。
まぁ、看病と言ってもやる事は無いから刀を磨いているが。
あのキツネ、順番に質問していくが口を割らない。こっちも疲れるよ。
ガチャ。ドアが開いた。入ってきたのはディ。
「交代だ。ったく、いい加減に言ってほしいぜ」
「ん？次交代するのはナイトじゃなかったか？平気なのか」
ナイトは何故か一度もルイの看病に回らない。
一番にルイと一緒にいたいと思うんだけどな。
「平気だとよ。で、ルイは？」
「変わらないさ。ま、心配ないだろ。じゃ」
俺は隣の部屋に入った。部屋の奥には縛られているコリュ。その傍には椅子に座っているナイト。
部屋の壁には様々な模様がある。全てナイトが書いたものだ。結界だとよ。
なるべく暴力を使わないようにしているけど、そろそろ限界かな。
「早く言ってくださいよ。ウィットってなんですか？何故貴女はお

嬢様を襲った？」
「……」
「キツネ、さっさと吐かないと楽になれないぜ？」
「あたしはキツネじゃない。コリュ」

いや、それだけ反応するのかよ。
ルイが起きていれば魔法で言わせるのに、俺達はその魔法もってないし。あぁ、面倒だ。
しばらく二人でしつこく質問したが何も答えない。と、ルイがおきたのか入ってきた。

「お嬢様、大丈夫ですか？」
「うん。平気。ディから全部聞いたよ。ごめん」

見た感じ普段とそこまで変わらなさそうだけど、魔力があまり感じられない。

「別に良いよ。それより魔法使えるか？」
「無理」

やっぱりな。あの暴走で使い果たしたんだろう。
これは、2、3日かかるな。回復するまでに。

「ルイと二人にさせて。話したいことがある」
「……それは無理な相談だな。テメェは魔法を使う。ルイは使えない。何するかわからねぇだろ」

ドアに寄りかかってディが言う。
二人きりにさせちゃいけないと俺も思う。何故か、そう思う。
しかし、ナイトは

「私は良いと思いますよ。華僑と二人で彼女の魔力を抑えれば良いのですから」
「でも、ルイが苦戦した相手だ。二人で平気か……？」
俺は気が進まない。でも、ルイ自身はそれで良いということで渋々従った。
ナイトと二人でコリュに強力な魔法をかけた。
「時間は３０分です。それ以上は認めません。貴女がお嬢様に攻撃した瞬間あなたの命は無いと考えてください」
破られそうな気はするけど、ただの思い込みか。
俺たち三人は部屋を出た。

「……俺は嫌な予感しかしない」
「あぁ。何で賛成した？ナイト」
「何となくですよ。もしこれでお嬢様に害を及ぼすようなら承知しませんが」

そのまま俺達はこの後の旅路を考えた。
次は城だな。しかも、ナイトが元々勤めていた城だ。ナイトは行きたくないと言っているけど、そこを通らないとダメだしな。
そして、３０分後ルイたちの部屋に入った。
……？ルイの様子がおかしい。ずっと下を向いている。
いや、それよりもなんだ？この部屋の空気は。気味が悪い。

「何をした？ルイに」
「何も。ただ、ちょっとお話しただけよ」

「話だけでルイがこうなる筈がねぇ！」
「貴女にかけた魔法が解けていますよ。お嬢様に催眠でもかけましたか」
コリュは口だけ笑った。
ルイはどうなった？

十話

動かない。お嬢様がさっきからまったく動かない。
催眠をかけられた者は催眠者の命令があるまで何も出来ずにじっとしている。
そう、当(まさ)に今のお嬢様に当てはまる。

「ナイトは言ったよな？ルイに何かをすればテメェの命はねぇと」
「ふふふ。貴方達にこのあたしが倒せるとは思えないわ」

ディは構えて私と華僑は剣（刀）を抜いた。
そして、コリュは声を上げて笑った。

「あはははは！ルイにはちょっとした簡単な命令を出したわ！
大丈夫、貴方達は殺されないわよ。じゃあね！」

ヒュンと消えた。
テレポート！？時空の彼方に行ったのかそれとも運良く普通に着地したのか……。
まぁいい。それよりもお嬢様が気がかりです。
何の命令を出されたんでしょうか。

「おい、ルイ！大丈夫か？何を命令された……？」

華僑がお嬢様の肩を掴んで聞いた。と、お嬢様はドアに向かって歩き出した。
ディが止めようとするがそれを振りほどいて進んで行く。
三人で止めればさすがにお嬢様が負けるが、このままにする訳にはいかない。

と、ディが離れてピィーー！と何処に持っていたのか笛を鳴らした。
「これで明日か明後日にはサラとアーマが来る。多分何とかなる筈だ」
そういってお嬢様の、恐らく魔石がある所を思いっきり殴った。
お嬢様はそのまま気絶した。少々荒いですが仕方が無いですね。
……そういえば私たちが出発する前にディがアーマに何かを頼んでいましたね。
それが、ディが合図したらそこに来いという事ですか。悪魔系の特長をしっかりと掴んだ作戦ですね。
悪魔系には他のものとは違う特徴がある。悪魔系が持っているある魔法を発動して、その間に何かの音を誰かが出す。すると、どんなに遠くてもその音を出せば聞える。
そういえば昔にもディとアーマは使っていましたね。だからあの時何もしなくても良かったのですか。

とにかく、お嬢様がまた目覚めて何処かに行かないようにまた順番で見張りをした。
そして、長い夜が明けた頃、アーマとサラがやってきた。
さすがに空を飛べるとあの距離もあっという間ですか。私達の苦労は一体……。

「どうしたの？ディ。僕らの仕事は？」
「ルイが催眠をかけられた。解けるか？あと、ウィットって知っているか？」
「ウィット？私、知っているよ。確か、国名は忘れたけどその国を治めている組織がウィット。んで、その国は魔法が凄い発達しているのよ」

サラが説明している間にアーマがお嬢様をじっくりと見ている。
恐らくお嬢様にかけられた催眠を見ているのだろう。と、アーマがため息をついた。

「この催眠は悪魔系じゃ無理だよ。天使系か強力な魔法系じゃないとダメ」

アーマが少し悲しそうな顔をした。
催眠や洗脳には誰が使っても解く方法が分かれる。
1、どんな魔法でも解ける。
2、天使、悪魔系しか解けない。
3、天使、悪魔系のどちらかしか解けない。
4、魔法系のみ解ける。
ちなみに、魔法系で強力な力の持ち主だったら全て解ける。

「うーん……」
「ルイ!?大丈夫?」
「おい、押さえろ。どっかに行くぞ。そいつは」
「へ?」

アーマがディの言うとおりにお嬢様を押さえたが、お嬢様は魔法を発動してアーマを退かした。
回復が早い……!洗脳とともにコリュの魔力もお嬢様の中に入れたのか……?

「え、ちょ、呪縛(じゅばく)の音(ね)!」

サラがとっさに魔法を発動するものの、お嬢様には無意味だった。
続けて私や華僑、アーマも止めに入るが全て魔法で跳ね返され、お

嬢様はそのまま何処かに行った。
私達全員は唖然として動けなかった。と、ディが床を叩いた。
「あの方向は時空のヒビの方向だ…！多分ルイを使って異世界に…
…！ちきしょう。ルイの魔力じゃ今から俺達が行っても間に合わな
ねぇ。第一、ヒビを直すためにルイを連れて来たってのによ……！」
もう、無理だ。終わりだ。遊び感覚で行ったのがいけなかったのか。
コリュの目的はお嬢様に催眠をかけることだったのか……！
これからお嬢様が居ないまま進むしかないのか……！？

十話（後書き）

第一章、完結――――

これからディ達はどうなるのか。そして、ルイの運命は……？

第二章をお楽しみに

十一話

「僕、ルイを追いかけるよ。この中で一番動けるのは僕だもん」

ルイが出て行ってから、俺達は話し合った。
アーマが椅子から立ち上がりそう言った。
俺はふと窓の外を見た。すげぇ街が壊れていてほぼ廃墟と化している。

「ですが、貴方はあのヒビから来る魔力に弱いですよ。近づいた途端動けなくなります」

アーマは不満な顔をして座った。

世界と世界の間には異空間がある。その異空間は者によっては害となる。俺たち魔道人形は天使、悪魔系に当たる。
先に言っておくが、天使、悪魔系は貴重で色々他と違うんだ。

「誰か知り合いに天使系が居ないのか？」

俺はナイトをじっくり見ながら言った。
誰といいながらナイトに質問した。

「何故私を見るのですか」
「てめぇは良く女といるだろーが」

そう、ナイトは遊び人。まぁ、最近は収まってきたが。
街に行っては女に囲まれて遊ぶ遊ぶ。

「否定はしませんよ。まぁ、心当たりが無いわけではないですよ。でも、戦闘に全員向いていないですよ？」

勿論その女の中には天使系もいたはずだ。

「ちっ、使えねぇ」

「そりゃそうですよ。……ん？あの人形なら何とかなるとは思いますよ」

ナイトが顎に手を添えて言った。

「誰？」

「私の元同僚ですよ、華僑。勤めていた城の魔法系。彼女はお嬢様に匹敵出来るほどだった筈です」

それはかなりの凄腕だ。

ルイは知っての通り、この世界で一番の魔法使い。それに匹敵するということはかなりの使い手だ。

「でも、ナイトはその城に行きたくないんでしょ？」

アーマが両肘を付きながら聞いた。

ナイトはいつの間にか頬杖をしていた。

「当たり前じゃないですか、アーマ。ところでサラは何時まで黙っているのですか」

「んー、ちょっと考え事。あ、私はルイの所に行かないわよ。そのかわり、ウィットについて調べてあげる。アーマと一緒に」

サラはニッと笑った。

と、華僑が普段は見ない心配そうな顔をしてサラを見た。

「大丈夫か？」

「平気よ。華僑は心配性なんだから」

「「「（そう思わない）」」」

もうっ。とか良いそうな雰囲気だ。

あー。うぜぇ。そのラブラブムードを如何（どう）にかしろ。

俺はそれを壊すように今出されたことを纏めた。

「よし、少し纏めるか。俺とナイト、華僑はナイトが居た城に向かってから、ルイの元に。サラ、アーマは身の危険が及ばない程度にウィットについて調べる。これで良いな？」

俺は全員の顔を見た。

さっきまでそれなりにいつものほんわかムードだったが、もう、キリッとしている。

「ディが仕切っているのが嫌だけど僕は賛成」

「私も異論は無いです」

「俺もだ」

「私もよ」

「じゃあ、決定。行動するのは明日にするか」

俺はアーマを思いっきり睨みつけてから最期に言った。

＋＋＋＋＋

『ボス、ルイを連れてきました』

『おぉ、でかしたぞ！コリュ』

『あたしの方で準備を進めておきます。いくわよ、ルイ』

『……（皆…、僕の身勝手な行動を許して）』

十二話

またサラ達と分かれて3日。元々ナイトが居たと言う城に着いた。
ナイトは体中をマントで覆い、フードを被った。
ディも始めに貰ったマントをつけていた。そして、フードをルイみたいに深く被った。
二人とも似ている格好。

「私達は基本喋りませんからね。むしろ喋りたくないです。ディと私の素性は知られています。華僑、貴方だけが頼りなんですよ」
「はいはい。で、どうすれば良いんだ？」
「城に入ったら適当な兵士に獅兎(しう)を探していると言って下さい。多分つれてきてくれます」
「分かった」

俺達は城の中に入った。
城下町は城の中にある。だから街の人は安心して暮らせるらしい。
治安も良く、住みたい街ベスト3に入っているほどだ。ミワ王国って言っていたな。

随分賑やかだなぁ。大きな道の両端には色々な店があり、その奥には集合住宅。見回りの兵士と街の人が笑顔で挨拶したり、小さい人形とぶつかっても兵士は笑顔で助けている。兵士だけじゃない。柄の悪そうな近衛兵も悪いことをしていない。キザっぽい騎士も居る。……そうか、此処の騎士はみんなキザになるのか。ナイトも例外じゃなかったのか。

俺は適当な兵に獅兎について聞いた。すると兵は城の奥へと案内してくれた。

着いた部屋は魔法陣が多くいかにも魔法を研究しています的な場所だった。兵はその奥に行って呼んできてくれた。
兵と一緒に出てきたのは獅子とウサギを足して2で割ったような人形。
兵は部屋から出て行った。

「はじめまして。赤髪。自分、何か用？」
「貴女に頼み事があってきました」
と、ナイトとディがフードを取った。
獅兎はそこまで驚いた様子ではなく、むしろやっぱりと言う雰囲気だった。

「力のある天使系を探しています。探してくれませんか？」
「探すのはヤ。でも自分、天使の卵持ってる。孵化する。きっと力なる。でも、お前達、悪、心持つ。力なくなる」
変な喋り方だな。理解しにくい。
と、ディが
「つまり、俺たちが悪しき心を持っていなければその卵から生まれた人形は俺たちの力になる、と」
「そ。まってて」
ととと。小走りで奥に行って何かを持って戻ってきた。
手にあるのは、銀の細い針金で作った物の上に綺麗な緑色の羽のある卵。すごく、綺麗でずっと見ていたいほどだ。
ん？卵？？卵から生まれる人形なんて聞いたこと無いぞ。

「そう、特別。これ、特別。……名前」
「獅兎は心が少し読めるんですよ。と、この人形は華僑です」
獅兎は俺を見た。俺の目を。
心が読める、か。凄いな。そして、ナイトたちは何でコイツの言うことを理解できるんだ。
「華僑。良い。卵、2，3日」
……お願いだからもう少し分かりやすく喋ってくれ。
俺には理解できない。
「お前、失礼。ルイ、どこ。……ウィット？あぁ、そういうこと。わかった。これ、やる」
そういって何かを取り出した。小さなわっか。一箇所だけ宝石みたいな七色の石がある。これも綺麗だ。
にしてもさっきの一瞬で俺たちの心を見て状況を把握するって凄い。ふと獅兎を見ると勝ち誇ったような表情だった。
……あまりさっきから変わってないけど。
「孵化する。それ、つける」
つまり、孵化した人形にそれを付けろと。
よし、少しは理解できるようになったぞ。
「サンキュ。じゃあ、俺達は街の宿屋に孵化するまで滞在するか。それから出発だな」
「ダメ。ナイト、残る。皆、待っている。帰ってきて」
「嫌です。先に言っておきます。もし誰かが私を連れ戻そうという

ならその人形を倒しますので」

そのままナイトはフードを被った。ディも被った。卵は俺が持っている。

獅兎は少し寂しそうな顔をして奥に消えて行った。

十三話

ピシっ、ピシピシピシっ！
宿の私達が取った部屋のテーブルの上に置いておいた卵がとうとう孵化するらしい。
卵には無数のヒビが入り始めた。私はすぐにディと華僑を呼んだ。

ずっと見ていると光った。目を閉じ、また開けるとそこには緑と水色を混ぜたような綺麗な色を主な色とした綺麗な鳥が居た。その色はオーロラを思わせる。
頭から背中は色があり、足の方は白。尻尾はそれなりに長く先っちょがくるんとしている。
なんというか、美しいとしか言いようが無い。鳩よりも少し大きいぐらい。
その鈴とした姿は何故か、私は神を思わせた。神々しい。
この世界に神はいないはずだ。それなのに何故私はそう思う？

「すっげぇ……。これって本当に人形なのかよ？」

ディがそう言い、鳥に手を伸ばした。鳥はディを見つめて動かない。
ディの手は鳥に触れた。

「……絹か？これは。とにかく俺たちを作っている布よりもすげぇ高価なもんだと思う。天使系と見て間違いないと思うぜ」
「ふーん。そういや、孵化したら獅兎に見せる約束だっけ」
「えぇ。行きましょうか」

再び獅兎の元へと向かった。
獅兎を呼び、鳥を見せた。すると、獅兎は珍しくいつもの表情を崩

した。

「凄い。お前達、凄い。心、綺麗。鳥、綺麗。名前、お前達、つける」

「端からそのつもりですよ。フィルです」

三人で考えた名前。

……ネーミングセンス無いとか言わないで下さいよ。

「そう、フィル。良い。凄く良い。北、ずっと北、ルイ、いる。早く、行け」

「あぁ。サンキュ」

「ありがとう」

「分かりました。では」

私達はまた宿に戻り、身支度をしてすぐに出発した。フィルはディのフードの中にすっぽりと納まっている。

馬に跨り、走らせた――。

途中、何度も何度も敵に出くわした物の、全て倒し、北へ北へと進んだ。

そして、空が時空のヒビでいっぱいになった頃、とうとうお嬢様がいるであろう城についた。

フィルはその間ずっと成長してきた。もう今は羽を伸ばすと1mはあるであろう巨鳥に。恐らく一人ぐらいなら乗せられるであろう。

しかし、美しさはさらに磨きかかった。

「おい、あれ見ろよ。魔石が……」

ディが指差す方向を見ると魔石が空に昇っては砕けて、昇っては砕

けて……。藍色の魔石に茶色の魔石、銀色の魔石に水色の魔石、白の魔石に黒の魔石……。魔法、格闘、武器、音楽、天使、悪魔だろう。

もう、私達の真上の空はヒビなんかなどではなく、もう異空間が見えていた。

異空間を見た瞬間私はヒザから崩れ落ちた。

――あれは気味が悪いなんて物じゃない。頭が狂いそうだ……！

ベシィ！誰かが私を殴った。

「しっかりしろ、ナイト。お前、発狂するつもりかよ」

「す、すみません……。って、ディと華僑は平気なんですか？」

「フィルが守っているらしい。お前も来い」

私はフィルと一番遠い。だからか。フィルの魔力が私まで届かないみたいだ。

……にしてもでかいですね。もう、ディの身長超えてますし、私と同じぐらいですかね？

そのまま私達は城の中へと入っていった。

気味悪い。瘴気が強いというかなんと言うか……。フィルが居なかったら平常心ではいられませんね。これ。お嬢様は無事でしょうか。ずっと歩いていく。しかし、誰も居ない。罠か？しかし、足を止めるわけにもいかず、そのまま歩いた。暗い廊下の遠くに誰かがいる。二人だ。後ろにもいる。

「誰だ？テメェ」

その人形はゆっくり私達に近付いて来た。私達は戦闘準備をする。帽子をかぶっていますね。魔法使いでしょうか。シルエットがお嬢

様と似ている……いや、あれはお嬢様だ。誰かを引きずっている。

「ルイ！大丈夫か！？」

華僑が声をあげた。

お嬢様はもっと近付いて顔を上げた。その目の下には隈があり、疲れ果てている。服も帽子もボロボロで怪我もしている。

お嬢様が引きずっていたのはあの、コリュだった。彼女はお嬢様よりも怪我が酷い。

「たす、けて……！」

「っ～、リュア！」

私は回復呪文を唱えた。しかし、発動されない。何故？

「ハァハァ…、こ、此処は、ま、りょく、が、無効、化され、るの、よ……！」

まだ喋れたのか。コリュが説明した。

……何故私達に味方するような発言を？彼女は敵ではなかったのでしょうか……。

分からない。何が起こっているんだ……？

十四話

城に入り、そこで出会ったのはボロボロのルイとコリュだった。
何故かルイはコリュを助け、コリュも俺たちに助言をした。華僑もナイトも状況が分からない。
そして、怪我を治そうとナイトが魔法を唱えるものの、発動されなかった。ここは魔法が無効化されるらしい。
ふと、俺はフィルを見た。フィルはルイをじっと見つめている。ルイもフィルを見ていた。と、フィルが光った。
途端に二人の怪我が治った。ルイはフィルに笑いかけた。

「ありがとう、綺麗な鳥さん」

ルイは、そのままフィルに近寄ってフィルを撫でた。気持よさそうにしている。

「おい、テメェ知ってるのか？つーか、コリュ、オメェは何なんだ」
「……詳しい説明は後よ。ルイありがとう。とにかく、お逃げなさい。死ぬわよ。ボスは狂った。もう、誰にも止められない。あのヒビも止められない。手遅れよ」
「どういう……っ！危ない！」

ナイトが聞こうとした途端、コリュの身体が吹っ飛んだ。それを華僑がキャッチした。ナイス。
コリュがいたところを見ると、そこにはフランケンシュタインのデカイ人形が居た。
おそらく俺と同じ格闘系だな。パワーは俺より強ぇ。もしかして、あれがコリュの言っていた『ボス』か？

「ダメじゃないか。悪い子にはお仕置きだよ。さて、君達はなんだい？この俺を止めようとしてきたのか？この魔力が使えない場所で？無理だな。さぁ、無断進入した悪い子にはおs…プギャ！」
「悪ぃけど、喧嘩はヨーイ、ドンじゃねぇんだよ。魔法が使えなくたって俺達は戦えるぜぇ？」

俺は顔に思いっきり蹴りを入れてやった。それを見た華僑とナイトが一斉に攻めた。
ルイとフィルはコリュの所へ向かった。また、フィルが治している。何で魔法が使えるんだ？

「……滅多切り」
「そのままですね。私だったら剣の舞とでも言いましょうか」
「ナイトもそのままの名前だな」
「貴方もでしょうが」

華僑が休む暇もなく連続で『ボス』を斬りつけていった。ナイトも同じようにした。
……随分余裕だな。俺はすげぇ嫌な予感がする。何なんだよ……？
そして、二人の攻撃が一瞬止まった。その隙に『ボス』が反撃をする。二人の身体が遠くに吹っ飛んだ。

「ナイト！華僑！……！？」

俺は『ボス』を見た。傷が一つもない。しかし、二人の攻撃は当たっていた。俺の蹴りも当たった。
傷一つ付いちゃいねぇ。んだよコイツ。無敵か？いや、無敵なんていない。
これか、嫌な予感ってのは。
俺は一旦引いた。攻撃しても意味が無いからどうするか考えるが、

何も浮かんでこない。

「ボス、いえ、ナルフェは魔法でしか攻撃が効かないのよ……！でも、此処は魔力は使えないの」

「じゃあ、無理じゃねぇか！テメェ、魔法隊の隊長だろ！魔法系掻き集めて一斉に使えば何とかなるだろうが！」

「無理よ。もう、皆いない。犠牲になったのよ。……！危ない！！」

コリュが俺に忠告した途端、俺の身体も吹っ飛んだ。

「うっ…あっ……！」

「ディ！……！？鳥さん！？」

薄れ行く意識の中、最後に見たのはフェルが今までよりも一番強く光ったことだけだった。

十五話

『私はフェル。私の魔力で魔法を使えるようにするから』

僕の頭に直接声が響いた。凄く頭がキンキンする。

フェル？誰？僕は鳥さんを見た。鳥さんも僕を見ている。あぁ、この鳥さんってフェルって言うんだ。

天使系かな。凄く質の良い布が使われているなぁ。良いなぁ。……

え？僕は洗脳されたんじゃないかって？後で説明するよ。

じゃなくて！フェルは魔法が使えるようにといった。さっき、コリュがナルフェ（目の前に居るでっかい人形ね）は魔法しか効かないって……。よし、僕の出番だ！

フェルノ光が消えたと同時に僕は試しに炎を出した。

「ファイアー！……出た！フェル！ディ達をお願い！」

フェルが頷いてディ達に向かったのを横目に見ながら僕はナルフェを見た。

うん。効いている。僕は続けて魔法を発動しようとするが、ナルフェも攻撃を仕掛ける。それを避けて今度はウォーターを唱え、そのままサンダーも唱えた。

さっきのファイアーで火傷した所がいきなり冷えた途端に電撃が走る。しかも、ウォーターで出された水は不純物でいっぱいだ。電流が走りやすい。

……さすがにやり過ぎたかな。そう思ってナルフェを見た。うわぁ、綿（僕らの中身）がいっぱい出ているよ。でも、痛みを感じないのかまた僕に攻撃をする。今度は両手で連続で。

さすがに避け切れなくてバリアーを張ったが力ずくで破られ、僕はギリギリ避けた。あ、服破れた。
バリアーはダメか……。にしても凄い力の持ち主だなぁ。僕のバリアーは結構強力なのに。さて、早く片をつけないと……！異世界と通じちゃう！でも、どうしよう。

そう僕が考えているうちにも攻撃は続く。僕はバリアーと体術で何とか避ける。バリアーは破られるけどちょっとは時間稼ぎになる。気休め程度だけどね。
と、僕の横から刀が出てきた。魔力を帯びている……！華僑の刀だ！

「こうすれば効くだろ！この、バカ力！」
「華僑！……君がいうことじゃないと思うけどね。大丈夫？」
「お嬢様、一言多いと思いますよ。私は大丈夫です！ほら！！」
「ナイトに聞いていない。ディは？」
「俺も治ったが、魔力が使えねぇからまだ戦えねぇ。悪ぃ」

華僑の刀はナルフェに刺さり、華僑の力で後ろにとんだ。
とりあえずナイトを一発殴って、ディの傍に行った。

「僕がディの身体に魔力を纏わせるよ。華僑、ナイト時間稼ぎよろしく！あと、詠唱も唱えるから」
「あんまり魔力が大きすぎますと大変ですよ？まぁ、分かりましたけど」
「無理するなよー」

二人はナルフェと戦い始めた。僕はディの手足に魔力を送った。すると、ディの手足の周りが魔力で覆われた。それをディが見た瞬間、ディは二人の元へと向かった。
まったく、お礼も無いんだからっ！……僕が詠唱を唱えるときはか

なり大きな魔法を唱えるときだけだ。倒れなきゃ良いんだけど。ん？そうだ！コリュとフェルに手伝ってもらおう！
僕はコリュとフェルに協力を要請した。二人とも頷いてくれた。ちらっと三人を見た。ちょっと苦戦している。もう少し頑張って……！

「じゃあ、いくよ！」
「えぇ」

僕は詠唱を唱え始める。コリュとフェルは僕にどんどん魔力を送ってくれる。
僕は間違えないように早口でどんどん詠唱を言う。僕の周りに魔力があふれ出す。それがどんどん大きくなってディ達にも届いた。そしてここに居る全員を包み込んだ瞬間、僕の魔法は発動された。

「ペクティス！」

僕はもう立てなくてその場に座った。周りを見た。
ディ、ナイト、華僑の三人は力がみなぎった様に元気になっていく。逆にナルフェはどんどん弱っていく。

この魔法は魔石に直接関与する魔法だ。まぁ、結構難しいし、魔力を凄い消費するけど。ナルフェの魔石から奪った魔力を三人に送る。特にディは同じ格闘系だから一番力がみなぎる。
格闘系の魔石には動きを良くする魔力が篭められている。だから今三人は凄く動きやすくなったはずだ。んで、ナルフェは動きにくくなったはず。補助魔法の一種かな。これ。

「き、貴様等ァァァ！！俺に何をしたぁ！君達は本当に悪い子だ！」
「まだ言ってんのかよ。さて、これでテメェの負けは決まったな。覚悟しろ」

ディが言い終わったと同時に三人はナルフェとの決着をつけた。
僕はフェルに魔力を貰っている。……あれ、二人から魔力を全部取るつもりでいたんだけどなぁ。どれだけあるんだろう。この子。僕の倍以上？それとも底なし？まぁいいか。
三人が僕のところに戻ってきた。と、華僑が刀の切っ先をコリュに向けた。

「お前、全部説明しろ。いや、それよりも空のヒビを止める方法を教えろ。それから全部話せ」
「え、えぇ。放すから刀下げて頂戴。あのヒビをとめる方法はほぼ無いわ。遅かったのよ。でも、手立てが何も無いわけじゃないわ。一人の人形の魔力を全てかけてなんかの魔法を唱えれば止められる筈よ。でも、全てかけるから死ぬわよ。第一その魔法をあたしは知らないわ」

皆は黙った。もう、何も出来ないと知って。いまきっと、皆は絶望に包まれているんだろうな。何のために此処まできたのかってね。
でも僕は思わなかった。その魔法を知っているからだ。
ただ、死ぬのが怖かったから使わなかった。知らない振りをしていた。でも、もうダメだ。僕がやらないと……！

「じゃあね、皆。楽しかった。僕がやるよ。知っているもん。その魔法。じゃ、バイバイ」
「おい！ルイ！」
華僑が僕を呼び、
「お嬢様！？」

ナイトが止めようと僕の腕を掴み、

「待てよ！」

ディがぼくの前に立った。僕は何も言わずに二人を払い、ダッシュで城を出た。

僕は泣きながら魔法陣を宙に画く。ヒビを止める魔法は超高等な召喚魔法。異世界の神を呼び出す魔法だ。

……あぁ、遠くからみんなの声が聞える。あ、ディが死ぬなって言っている。僕だって死にたくないよ。でもね、皆が死ぬんだったら僕が死ぬよ。

サラ、いっぱい歌を教えてくれてありがとう。最後に会ったのがあの状態でゴメンね。

アーマ、君とは最初敵だったね。でも、楽しかった。またどこか出会えたら悪戯しようね。

華僑、いつだったか君に助けられたね。あの時、華僑がいなかったら僕はいなくなっていたかも。ありがとう。

ナイト、いっつも僕に付きまとってちょっとウザかったけど、でもいっぱい助けられた。色々教えてくれた。死に行く僕を止めてくれてありがとうね。

ディ、君と過した時間が一番長かった。始めて会った時は嫌な奴だと思ったけど、今は凄く良い奴だと思っているよ。誰よりも僕を助けてくれて、皆を思って、一番仲間思いだったね。……お別れしたくないな。

魔法陣が書き終わった途端皆が城を出た。三人の顔を見た瞬間僕は泣いた。
でも、ニッコリ笑って、
「ありがとう。さようなら。……時空の神よいま、この世界と異世界をつなぐ道を塞げ。ディフェレント！」
僕の魔力がどんどん吸い取られていく。魔石から取られていく。最後に見たディは泣いていた。
――バイバイ、皆。大好きだったよ。

十五話（後書き）

次回、最終回

終わりのお話

「ルイ、ルイーー！！！」

ディは今まで見た事が無いぐらい泣いていた。そして、ルイの元へと向かった。

空は青々と輝いている。時空のヒビは直った。ルイによって。しかし、そのルイはもういない。

ナイトはゆっくり歩きながら下を向いていた。ポタポタと涙が零れ落ちていた。

華僑はその場に膝を付き、座り込んだ。彼のヒザにはどんどん涙が落ちていった。

コリュはボゥッとルイを見つめていた。フェルは大空へと羽ばたいてしまった。

ディはただの人形となったルイを抱きしめた。ルイの傍にはまだ魔力を帯びている魔方陣。そこには彼女が最後に伝えたかったメッセージがあった。

ディはそれに気がつき、読んだ。そして、叫んで叫んで大粒の涙を流した。

ナイトも魔法陣を見た。そのままルイの頬を撫で傍の木にもたれ掛かった。

と、バサッバサッとフェルが戻ってきた。その背中にはサラとアーマが居た。二人は笑顔だったが、ルイを見た途端全てを察したのかサラは崩れ落ち、アーマはルイのそばへ駆け寄った。

「え、あ、ど、どうしたんだよぅ……」
「……ルイは、空のヒビを直すために命を捨てた。それだけだ」
アーマの問いにディは静かに答えた。
華僑は傍にいたコリュに聞いた。
「なぁ、お前はルイを洗脳してこうしようとしたのか？」
「えぇ。正確には洗脳はしていないわ。こちらに来たのは彼女の意思よ。まぁ、まさか本当に命を捨てるとは思わなかったけどね」
「……！お前がルイと出会わなければ――」
「あたしと会わなくても、こうなる運命だったのよ。怨むなら怨みなさい。彼女がそれを見てどう思うかは分からないけどね。じゃ、あたしは旅にでも出るわ。ルイの冥福を祈る。テレポート！」
コリュはどこかへ行ってしまった。華僑は地面をこぶしで叩いた。とても、悔しそうに。
その後、丸一日全員泣いていた。
＋＋＋＋＋
「なぁ、こんなんで良いのかよ？」
「わかりませんよ。でも、お嬢様の本にはこう書いておりましたが」
あれからどれだけの月日が経ったのだろうか。もう俺達は立ち直った。
いま、俺の首にはルイの魔石がある。普通、死んだ魔道人形の魔石は消えてなくなる筈だ。だけど、ルイのだけは何故か残った。
俺とナイトはルイの魔法について書かれた本を見た。その本の最後のページには、まだ人形になる直前に使った魔法が書かれていた。
そう、異世界を作る魔法。扉が出来て、その向こう側に新しい世界

が出来るらしい。今から俺とナイトでやってみようとしている。

「出来るのか、俺達に」

「やってみないとわかりませんよ。では、いきますよ」

ナイトが詠唱する。と、魔法陣が光り始めた。いけるか……！？

しかし、何がいけなかったのか扉が出来ないまま俺達は新世界へと飛び立たされようとしている。

そのとき、運が良いのか悪いのか華僑が入ってきた。華僑は状況が理解できないまま巻き込まれた。

今度は死なせねぇ。守って見せる……！

俺の意識はもうなくなった。

＋＋＋＋＋

知識、感情を持つ者は大切な人を守るために全てを捨ててしまう。

そして、全てを巻き込み、時には大事になる。

彼らも例外ではなかった。友達を巻き込み、世界を巻き込み……。

彼らは新しい世界でも同じことをするであろう。しかし、それは、叶わない。

次で最後。もう、世界を作る力は彼らには無い。

彼らは罪深き者。新世界を作りすぎた。

彼らは罪深き者。彼らは他人を愛することの出来る者。彼らは——

終わりのお話（後書き）

これにて完結です。
ここまで読んでいただきありがとうございました！
まだまだ未熟なので、色々読みにくかったと思います。
これからも頑張っていこうと思います！
では、これにて失礼。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7678r/

異世界と此処と――

2011年10月6日06時37分発行